様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２６７

研究課題名（和文）1950－70年代における文化資本・文化産業としての文学に関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on the Japanese literature in the 1950-70s as cultural capital and cultural resources .

研究代表者
山岸　郁子（YAMAGISHI, IKUKO）

日本大学・経済学部・教授

研究者番号：９０２５６７８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　1950-70年代の作家の生活について、日記や資料などから実証的な調査を行い、分析を行った。戦後めざましく発展・変化を遂げたメディアにおいて作家がどのような役割を期待され、それに応えたのか、その実態を明らかにすることで、文学を「文化資源」化するということはどのような意味を持つのか、再定義を行った。また文学の市場価値がどのように確立したのか、政治・経済の背景を視野に入れて、横断的かつ個別的に検証した。さらに図書館や文学館などの文化行政や文化事業について調査を行い、多くの「文化資源」を発見し、都市部のみならず諸地域にまでどのようにその現象を波及させたのか、その実態について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：An empirical research and analysis was conducted on the lives of novelist from 1950s to 1970s based on diaries and other materials. The purpose of this research was to redefine the meaning of conversion to "cultural resources" through looking at the kind of roles novelist were expected to fulfill and the extent to which they were able to satisfy those roles while the media underwent immense growth and changes during post-war period. It also examined how the market value of literature was established through individual and cross-sectional analysis with a view to political/economic background. Furthermore, a large number of "cultural resources" were uncovered following an investigation into cultural administrative entities and cultural projects such as libraries and literary museums, and it revealed how such phenomenon had spread to regions other than urban areas.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学　文化資本　文化産業　文学館

１．研究開始当初の背景

1950 年代は朝鮮戦争の勃発や冷戦の深刻化などを背景に社会状況が変化する一方、高度経済成長の中で大衆消費社会へ日本が変貌していった時期である。申請者はその時期に計画された主要都市の文学館別に調査を行い、文学館設立に至る行政資料について既に整理・分析を行なってきた。(「〈資源〉としての文学」2012、「『今を考えることとは』文学館の〈いま〉を考える」2010)。さらに地方の文学館の実態について調査の範囲を広げ、現在の共通した問題をあぶり出し、人びとが娯楽や教養の対象を多様化させ文学の産業規模が縮小している現在、文学館の役割を新たに見出し、活性させるための学術提案を行うことが早急に必要とされていると認識したことが着想に至った背景である。

２．研究の目的

高度経済成長期以降の産業政策や国土開発をめぐる状況の変化により地域における「文学」・「文学者」が産業の振興にどのような役割を果たしたのか、またその影響について、文学館の研究員からの聞き取りをはじめ、地方財政に関する一次資料にあたるなどの調査を行い、文化資源としての「作家」ならびに「作品」が再発見される社会的な背景（事情）について分析することを目的とした。

さらに諸地域で推進された産業振興策において観光資源として文学や文学者がどのように発見され貢献したのか、観光地というメディアを通じて文学作品や作家がどのように流通されたのか明らかにすることを目指した。観光地での消費は交通網の整備や読者の余暇の過ごし方の変質とも関わる問題であるため社会的な背景にも目を配ることが必要と思われる。

さらに文学が教育・アカデミズムの場においてがどのように扱われてきたのか、また文庫のあとがきや新聞に連載をもつようなある意味で文化的価値を決定する文芸批評家の存在とその役割についての検討を行い、多角的な視点からその実態を明らかにする。特に作家と〈地域〉（ローカルとしての東京も含む）との関係を検証することによって、言論と表現の新たな諸相が見え、従来の文学研究を相対化することができると考えた。

３．研究の方法

まず、作家と地域の関係を次のように分類し、調査を行うこととした。

（１）

① 作家の出張（講演・調査など）によって地域と結びついている場合。

② 故郷や居住地、また、作品の舞台として、地域と結びついていたりするなど、すでに、関係が確立されている場合。

③ 舟橋聖一と彦根、川端康成と伊豆のように、作品の発表、劇化、映画化、テレビドラマ化などによって、新規に関係が確立して、顕彰されるまでに至る場合。

④ 文学賞、文学碑、文学祭などによって、イベント的に関係が構築された場合。

⑤ 文学館などの、箱物を建築するために地方自治体が投資している場合。

⑥ 地域在住者が作家の経済的援助者であった場合。

⑦ 別荘の所有や、避暑などの旅行で滞在していた場合。

⑧ 戦時下に疎開によって滞在していた場合。

さらに、代表者と分担者とで以下のように明確に担当を分けて、調査を行い、成果を統合した。

（２）

① 高度経済成長期に文化資源としての作家がどのような役割を果たしたのか、文学館に展示されている作家について調査を行い、展示の構成などから、文化的意味づけを分析し、また観光資源としてどのように活用されて

いるのか、行政資料にも目を配りながら明らかにする。

② 主たる対象である各文学館との相互信頼にもとづいて企画と入場者数や財政資料にあたり、文化資源としての価値を示すためのデータベースを構築する。また今後の企画材料を可視化するために、文学館がそれぞれに蓄えた文献学の成果を基盤として、収蔵資料の画像と研究情報を含む最新データを統合する。

研究期間の３年間で、（１）・（２）２段階の調査を組み合わせながら行い、成果情報を共有しながら、データを集積し、多角的な視点で検証を行った。

４．研究成果

（１）

1950 年代は、朝鮮戦争の勃発や冷戦の深刻化などを背景に社会状況が変化する一方、高度経済成長の中で大衆消費社会へ日本が変貌していく時期である。その時期に計画された主要都市の文学館別に調査を行い、その問題点について整理し、分析を行なった。

日本における文学館のモデルとなる日本近代文学館誕生のきっかけは 1961 年立教大学小田切進研究室が催した大正・昭和文芸雑誌展に高見や大岡昇平・池島新平・平野謙・阿部知二・秋山清が足を運んだことによるとされている。そこから同時代の作家や評論家、研究者に館の必要性が波及していったのである。設立の趣意書は 1963 年 4 月と 11 月に出されているが、その書き手である川端康成は「文学」の「伝統」こそが「日本の誇り」であると、文学館の意義を強調している。これは日本の伝統を意識した創作態度とも連続していく問題系であると同時に日本の固有性を示す文化資源として「文学」を保存する重要性について説いたものである。

ここから文学館の設立は地方へ波及していくのだが、それを支えたのが文学館運動であった。野田宇太郎は、丹念に文学者の遺跡や、文学作品ゆかりの土地を訪れ、「文学散歩」という言葉を作った研究者であるが『定本文学散歩全集』（雪華社 1963）『日本文学の旅』第一期十二巻（人物往来社　1967）に結実されているように、祖国の文学風土を理解するためという使命感をもって国土の中にピンを打ち、それをつないでいった結果、旅程という時間と空間を提示することとなった。その「旅」は東京の隅田川から始まって、湘南・鎌倉に足を伸ばし、東海道、近畿、中国、四国、九州と辿ってゆくのだが、文学館の名前はほとんど出てこない。実際この時期にあったのは藤村記念館（1952 年開館）くらいであり、ほかは住居跡碑のみで、この時点では文学館らしい施設はほとんどなかったといってよい。しかし 1950～60 年代にかけて日本は文学全集ブーム・週刊誌を媒体にした大衆小説、社会小説の流行、いわゆる戦後派の活躍に象徴されるような「文学」の大収穫期を迎えていた。このような時代状況を背景として各地方で文学館を設立しようとする動きが起こったのである。

さらに文学館開館から現在に至るまでの実態について、入場者数について時代をおって計量的に分析し、現在抱えている問題について数値的に明らかにした。

（２）

2014 年に日仏文化事業交流の成果としてパリ日本文化会館で日本近代文学館「川端康成と『日本の美』」展が開催され、研究分担者十重田裕一もその事業に企画から参加し、成功に導いた。展示会場の日本文化会館は従来から日本の美術工芸やアニメの展示は行なわれていたが文学展示は初めてである。フランス人セノグラファー（舞台美術家）による紙で構成された展示空間と、日本が提供したキャプションが川端世界へ誘引するための重要な役割を果たしたことは疑いなく、このキュレーションは今後の日本の文学展示

においても参考になるものであった。この経験をふまえての今後キュレーションの提案は、国内外に対してインパクトを与えることが期待できる。

（3）

改造社の『現代日本文学全集』（1920 年代）・『新日本文学全集』（1940 年代）についての研究の連続性のもとに 1950 年代に出された『現代日本文学全集』（筑摩書房）・『昭和文学全集』（角川書店）などの全集出版事業とその宣伝活動について調査・分析を行い、地方の文学館運動や文学館設立の動きとの関連性について考察した。文学全集という制度が成立するには時代との折り合いが重要であり、それに沿った作家ヘゲモニーがそのつど創出されることが明らかになった。全集という商品に内在する「政治性」について改めて考えるとともに、歴史的な検証を行い、文学研究もまた文化産業とは無関係ではないことを明らかにしてきた。これを踏まえた上で、現在の出版不況の中、文化資源を文学全集という企画と切り離したかたちでどのように存続させていくべきなのか、本研究の成果を根拠として提案していくつもりである。

（4）

地方都市（札幌・小樽・花巻・大阪・金沢）の文学館について財政的な一次資料の調査を行い比較のためのデータ入力を行なった。また、データは館が収蔵している資料で汎用性があると思われるものを抽出できるように工夫した。現在文学館は指定管理者制度、公益法人制度改革によって入館者数等の実績を問われるようになり、今後淘汰されていく施設も出かねない。文学館も時代に合ったキュレーションやイベントの実施が必要となっている。例えば、説明板・碑といった名所・旧跡や、建造物、石碑といったその地域に関連する文化財は、歴史・文化を知る契機を一般に与えるとともに、街歩きの楽しみを提供する文化資源でもある。今後文化資源の活用のために本研究の成果（データベース）の利用を文学館へ推進し、文学研究のみならず観光案内・生涯教育・学校教育など広く利用価値のあるものとし、社会への貢献を実現する。

（5）

研究を進める中で、研究テーマ以降の時代である 1980 年代以降の都市の郊外への拡張と 90 年代後半の内部へのコンパクト化を進める政策が、文学資源にどのような影響をもたらしたのか、資料を集め、考察を行った。現在へ繋がる出版不況前夜を読み解く意味もあった。文化資源は恣意的な経済活動における価値でしか判断されない傾向にあり、独自性を失った、似たような資源利用の方法（文学展示の仕方や観光産業との提携など）が多く見出されるようになった。

文学研究にも多くの理論変動の後、カルチュラル・スタディーズの時代を迎える。歴史社会的な資料の掘り起こしや蓄積、精緻な分析の基盤に立ったものであるが、これも当時文学の産業規模が大きく、文藝批評あるいは近代文学研究が脱領域的を可能とする産業基盤に守られていたものであった。

現在、文学ならびに文学研究、出版の産業規模が縮小化した中で一気にトランスナショナルあるいはグローバルネットワークにおいて「文学」が消費関数ですらなくなりつつある。今後さらに検討対象とする時代を現代まで広げ、文化資源をどのように再定義し、活用するべきなのか、引き続き検討・提案していきたい。

５．主な発表論文等

［雑誌論文］（計 13 件）

（１） 山本芳明「菊池寛論―歴史小説と自意識」「学習院大学文学部研究年報」64 輯、pp135-158、2018 年、査読無

（２） 山本芳明「夏目漱石の経済的〈真実〉」「学習院大学文学部研究年報」63 輯、pp99-122、2017 年、査読無

（３）十重田裕一「占領期日本の検閲と川端康成の創作―「過去」「生命の樹」「舞姫」を中心に」『川端康成スタディーズ　21 世紀に読み継ぐために』pp.193-203、2017 年、笠間書院、査読無（依頼）

（４）山岸郁子「『東京』論という幻影」『文学』17(6) 、pp.130-142 、2016 年、岩波書店、査読無（依頼）

（５）山岸郁子 「イメージとしての『郊外』」『研究紀要』 (80)、pp.37-47 、2016 年、日本大学経済学部、査読無

（６）山本芳明「文壇と市場のアルケオロジー」「文学」17（３）、岩波書店、pp68-83、2016 年、査読無（依頼）

（７）山本芳明「漱石の家計簿」「学習院大学文学部研究年報」62 輯、pp77-103、2016 年、査読無

（８）山本芳明「日本近代文学の経済史」「経済セミナー」688 号、日本評論社、pp38-43、2016 年、査読無（依頼）

（９）十重田裕一「せめぎ合う占領期事前検閲と改造社文芸出版―一九四五-四六年・横光利一『旅愁』を中心に」『日本文学』第 749 号、pp.54-64、2015 年、日本文学協会、査読有

（10）十重田裕一「二〇一四年秋、パリ、国際シンポジウム」『日本近代文学』第 92 号、pp.153-158、2015 年、日本近代文学会、査読無（依頼）

（11）十重田裕一「草稿から出版へ―横光利一の直筆原稿を手がかりに」『近代文学草稿・原稿研究事典』、pp.26-36、2015 年、八木書店、査読無（依頼）

（12）十重田裕一「松本清張と新聞小説」『松本清張研究』第 16 号、pp.30-41、2015 年、北九州市立松本清張記念館、査読無（依頼）

(13)山本芳明「市場の中の〈私小説〉―宮内寒弥と上林暁の場合」「学習院大学文学部研究年報」61 輯、pp95-117、2015 年、査読無

〔学会発表〕（計１件）

山岸郁子「文化資源（コンテンツ）としての文学」（ディスカッサント）
横光利一文学会　2018 年 3 月 17 日

〔図書〕（計１件）

山本芳明『漱石の家計簿』
教育評論社　2018 年 4 月 20 日発行、
全 335 ページ、ISBN 486624013X 、

６．研究組織

(1)研究代表者
山岸　郁子（YAMAGISHI,Ikuko）
日本大学・経済学部・教授
研究者番号：90256785

(2)研究分担者
山本　芳明（YAMAMOTO,Yoshiaki）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：90191460

十重田　裕一（TOEDA,Hirokazu）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：40237053

(3)連携研究者
金子　明雄（KANEKO,Akio）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：70233872

中山　昭彦（NAKAYAMA,Akihiko）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：80261254